
白い蜘蛛と幻想郷

鈴ノ風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い蜘蛛と幻想郷

【コード】

N5611U

【作者名】

鈴ノ風

【あらすじ】

ある日、幻想郷に一人の妖怪がやってきた。これはそんなお話。

001 幻想入り（前書き）

この作品は東方の二次創作です。

原作ブレイク、キャラ崩壊、独自設定、オリキャラ幻想入り、駄文乱文、そもそもプロットが不完全、その他諸々が含まれております。それでも構わん！ という勇者以外は直ちに『戻る』ボタンを押して、他の小説を検索することをお勧めします。

あと最後に、『東方妖狐録』とはあまりリンクしてません。具体的にはあつちの主人公は出てきません。そちらも合わせてご承知ください。

それではどうぞ。

001 幻想入り

幻想郷。

忘れ去られたもの達が住まう、極東の楽園。

そこは、科学を重視するもの達からすれば異端であり、オカルトを信じるもの達にとっては桃源郷である。

「しかし、夏は流石に暑いねえ」

幻想郷は日本の中心部に位置する。そう、あくまで『位置する』のだ。幻想郷は天国地獄のような異世界ではない。

物理的、そして常識的に結界によって隔てられているが、現実の世界と幻想郷は、全くの別物と言うわけではない。

小島をイメージすれば良い。他の大陸とは、海という絶対的な壁によって仕切られた島を。現実の世界はこの場合の大陸であり、幻想郷はこの場合の小島である。

船や飛行機という移動手段を使わねば、つまりは何らかの特殊なルートを通らねば辿り着けぬ場所。足では決して辿り着けないと言う意味では、小島も幻想郷も大差ない。

「いやいや、着物が白で助かった」

さて、この幻想郷は結界によって隔離されている事は先ほども述べた。

ならば、と疑問に思うものもいるだろう。ならば幻想郷に辿り着く事は不可能なのか、と。

答えは否。不可能では決していない。

現実の世界と幻想郷、その二つの境界である場所が存在するからだ。

「こづい夏だからこそ、服くらいは涼しくなくちゃ」

博麗神社、というのがその場所の名だ。

この神社は、そのものが一種の結界であり、またたった一つの通路である。

ここを通れば外の世界にでられ、また幻想郷に辿り着ける。

まあ、幻想郷の住人は外の世界に住めないからこそ幻想郷にいるのだし、外の世界はそもそも幻想郷の事を知らないのだから、博麗神社が通路として使われるのは殆どない。

「ああ、見ているだけで極寒の雪国を思い浮かべるね。最高だ」

また最近では、境界を弄くって両方を行き来するスキマや、結界に干渉して無理やりやってきた神様などがあるから、そもそも博麗神社を通路として使う意味さえなくなりつつある。

外の世界へ、また幻想郷に行きたいのなら、スキマ妖怪を何とかして見つけ出し、外や中を通して欲しいと頼めば良い。

博麗神社を通路として使うのは、かなり面倒なのだ。

元々が一つの結界。通路として使える、というより通路として使えなくもない程度に過ぎない。

計算に例えよう。普通人間ならば二十桁単位の掛け算を、暗算でできない事もないだろう。だがそれにはかなりの計算能力、記憶能力を必要とされる。筆算でも難しい。

だが電卓を使えば簡単だ。表示できる桁の限界、という問題があるが、その場合は表示できる電卓を用意すれば良いだけの事。

「……ま、石段が凄く熱いから、あんま服の意味ないんだけど」

電卓が手に入る環境ならば、例え手元になくても、用意すれば良

い。わざわざ暗算や筆算で、頭を駆使する必要はない。

これと同じか、それ以上に、博麗神社を通るのは面倒なのだ。

「さて、到着到着。これが博麗神社かい」

だがここに、例外が来ていた。

そいつは少し寂れた神社を、興味深そうに眺める。

「思ったより整備されてる。信仰はちゃんと集まってるってことかい」

着ているのは江戸時代を思い浮かばせる和服。色は完全な白。和服の上に羽織った着物には、白の純度の度合いで模様が出来ているが、基本白以外の色は存在していなかった。

「こちら側としては珍しい。諏訪のあれだって、信仰不足で逃げ出したのに」

年齢は14・5ほどか。肩のあたりで切りそろえられた白髪が、幼さを強調している。

「ま、結界に信仰は必要ない、か。紫の奴も、随分面白そうなものを作るじゃないか」

性別は不明。少年と言われれば少し疑問が残り、少女と言われても納得がいかない。

「さて、観察はお終い」

そいつは歩き出した。

神の通り道である参道の真中を堂々と通り、賽銭箱を飛び越えて、神社の戸を開け中に入る。

「中もそこそこ、か。バイトの巫女でも雇ってるのかな？」

土足で中に踏み込んで、そいつは詫びた様子がない。例えここに人が通りかかり、注意しても無視しそうなほどの無関心。礼儀というのを知らないのか。

「うんうん。中に入ったって意味は無さそうだ。道なんてどこにも

ない」

まるでそうであったほうが良いと言わんばかりに、頷く。

「それでもって、いい空気。境界なら、常識も非常識もないって事か」

眩きの後、笑う。

「ああ、そいつは良い。つまりここでなら」

楽しそうに、とても楽しそうに。

見ればあらゆる者が金縛りにされるほどの、恐ろしい笑みをそいつは浮かべた。

「久々に、全力を出せるわけだ」

すり足で左足を下げる。

「敵は難関を突破する」

振り向きざまに囁かれた言葉。

それが世界に侵食し、ルールを侵し書き換える。

変更されたルールは他のルールの矛盾をも書き換え、結果現実は豹変した。

そいつが望んだものへと。

「……………へえ」

そいつの視界に扉が映った瞬間、周囲はがらりと変わっていた。

少し寂れた神社から、整理された神社へと。

分かるものが見れば卒倒しただろう。

そいつはスキマ妖怪を探すより非効率的な博麗神社の通過を、たった一言で成し遂げたのだ。

「これはこれは、随分と美しい」

戸を開け、その先に広がった景色に、そいつは感嘆の声を上げた。そこに広がる緑豊かな森、美味しく住んだ空気、鳥たちの囀り。

現代ではまず見られないそれらは、誰であっても感動しただろう。

「さて、それでは」

行くか、と呟いて。
そいつは、幻想郷へと飛び出した。

太陽輝く暑い真夏のある日。幻想入りしたそいつの名は、
八ツ雲やっくもじ
椿ばきという。

001 幻想入り（後書き）

お久しぶり、始めまして。両方言っとけばどっちか該当すると思います。

どうも、鈴ノ風と申します。

訳あってもう一つの話が停滞しそうなので、新しい話を書くことにしました。今回は完全趣味、行き当たりばったりです。どっちも同じ東方二次ですが。

さて、三人称は久しぶりですが、大丈夫でしょうか？（汗）

もう一つのほうは一人称だけしか使わなかったので、久しぶりなんですよ、三人称。

つまらなかつたらご指摘ください。できる限り訂正しますから。

では、また次回。

002 八雲藍と再会の兆し（前書き）

この作品は東方の二次創作です。

原作ブレイク、キャラ崩壊、独自設定、オリキャラ幻想入り、駄文乱文、そもそもプロットが不完全、その他諸々が含まれております。それでも構わん！ という勇者以外は直ちに『戻る』ボタンを押して、他の小説を検索することをお勧めします。

あと最後に、『東方妖狐録』とはあまりリンクしてません。具体的にはあつちの主人公は出てきません。そちらも合わせてご承知ください。

それではどうぞ。

002 八雲藍と再会の兆し

視点 『八雲藍』

「さーて、油揚げ油揚げつと」

真夏のある日、私は人里に買い物に来ていた。買うものは決まっている。数日分の食料と、油揚げだ。

「おばちゃん、油揚げはあるかい？」

私は九尾の狐。狐である以上油揚げは大好物。油揚げがこの世から消滅するというのなら、私はこの世界なんていららない。

「あらあら藍さん。今日はいいいのが入ってますよ」

店のおばちゃんが差し出した油揚げを手に取り、眺める。

「……おお、これはまた随分と」

「いい感じに仕上がってるでしょ？ 今年は新しい大豆が外から来たらしくてねえ」

「それはそれは。奇跡みたいだな、神の思し召しか？」

外の世界の技術力は年々上がっている。

人里の住人や普通の妖怪たちは外の世界を知らない。だが私は知っている。その優秀さも知っている。それがいかに驚異的なものなのかを。

けれど、そんな私でも、電子機器や機械、社会的発展は、幻想郷にいればどうでもいいことに思えてくるのだ。

どうでもよくないのに、どうでもいいと思う。その理由は、それがこちらには存在せず、必要ですらないからだ。なくても困らないものが発展したところで、それを優れているとは思えない。

だが農業は違う。

嵐が来ても倒れない稲はこちらにはなく、そしてこちらに必要だ。

稲だけではなく、外の様々な農業技術は、幻想郷にとってとても重要な役割を果たす。

外から流れてくる技術は、どれもこれも一昔前のもの。だが例外外では時代遅れでも、明治から時代が進まない幻想郷では、充分な最先端だ。

「……まあ、農薬はあまり普及しないが。あ、おばちゃん。この油揚げ四つ頂戴。あときゅうりとじゃがいも」

「はい、まいど」

数十年の付き合いから、私が望む物がある程度把握していたのだろう。注文した品々がやってくるのに、それほど時間はかからなかった。

「ありがとう」

野菜を受け取り、その代わりにお金を渡す。

「さて」

買い物は終わった。

このまますぐ自宅に帰るのが、いつもの日課だが。

「今日は、寄り道をしよう」

何故そう思ったのかは分からない。

何か、そうしたほうが良いという、予感でもあったのか。

「あら、お久しぶりですね」

人里を目的もなく歩いていたら、知った顔に出会った。

「やあ。十六夜、咲夜だったか」

あの紅の館のメイド長、十六夜咲夜。

時間とナイフを操る彼女もまた、私のように買い物に来ていたらしい。

「それは油揚げですか。お似合いですよ」

「………そちらはトマトかい。お似合いだね」

馬鹿にされたのか誉められたのか分からなかったので、適当な言葉を返した。

「今夜はスパゲッティの予定なんですよ」

「こちらは特に予定は。ちなみに……」

私は、先ほどから気になっていた物を指差す。

「それは、一体何なのかな？」

「……ああ、これですか」

指の先にあつたのは、買い物袋に突っ込まれた糸の塊。

「先ほど、変わった奴に会いました。この糸を買ってくれと頼まれたんですよ」

「（君も大概変わっている気が……）ほお。ちなみに何の糸だい？前半は心にとどめる事にした。私だつて人の事言えないし、そもそも幻想郷でそれを言っても仕方がない。」

「本人は蜘蛛の糸だと。曰く、下手なワイヤーより丈夫だから、ナイフや戦闘にも結構耐えられる。だからそのメイド服の材料にどうだ、い、と」

「……へえ」

糸を売った奴は相当な目利きのようだ。

十六夜咲夜はナイフを使う。知っている者は知っているが、知らない者は全く知らない。

そこらの素人では、彼女のメイド服の中に、百本ものナイフが隠されている事に、気付きもしないだろう

だがそいつはそれを見抜いた。しかも戦闘とまで言っている。そいつは彼女の引き締まった肉体が、戦闘に適應した結果なのだと、理解できたのだろう。

「そこまでは。確かに随分変わっているね」

「しかも、驚くことに外から来たそうですよ。外の博麗神社は寂れてたとか何とか」

「………何？」

何故そいつは、外の博麗神社を知っている？

「そこを通ってきたそうですが、何か？ 巫女だって外来人を神社から帰すそうですし、不思議はないでしょう？」

「……確かに不思議はない。あそこは幻想郷と外の世界、両方に接する結果だ。それなりの実力があれば、もしくは資格があれば、通る事も通す事もできるだろう」

「なら何が」

「面倒なんだよ」

そう、あそこを通るのは面倒だ。

「そもそも、今言ったとおり、博麗神社はそれそのものが結界。幻想郷は外の世界から切り離された異界だがね、博麗神社もまたそうなんだ」

それも、幻想郷と外の世界、双方から切り離された。

「異界を経由して異界に行く。それが面倒なのは分かるだろ？ 博麗神社を通って幻想郷に来るといのはね、紫様に連れてきてもらうより非効率的なんだ」

あそこを真つ当な通路として使えるのは、私の主人である八雲紫と、代々の博麗の巫女たちだけ。

「……そう聞くと、あの人は相当凄い事やってのけたんですね」
「そう聞くも何も、そうなんだ」

しかし、これは興味深いな。

ここ最近、幻想郷を知ってやってくるもの達はある。私達の事を知っているもの達もいる。能力を持ったもの達だっている。

だが、博麗神社を突破するものなど、聞いたことも見たこともない。

「なあ、十六夜咲夜」

「何でしょう？」

「ぜひそいつに会いたくなかった。どんな奴で、今どこにいるか分かるか？」

彼女はそれを聞いて、やっぱりという顔をした。

まあ、この流れなら、こう来る事くらい予想できたか。

「容姿は上から下まで真っ白。髪も、服も。ああ、服は和服でしたね、珍しい事に」

「白、白、白？ 白で蜘蛛の糸つて、もしかして……」
メイドの言葉を聞いて、私の脳裏にある人物が思い浮かぶ。

……ありえる。

彼ならば、博麗神社を突破しても、不思議ではない。

あんな明確な壁など、彼にとっては紙ほどの薄さもないのだから。

「今どこにいるかは」

「分からないのか？」

「いいえ、と頭を振った。

「分かりますよ。紅魔館です」

「……紅魔館？ 君の家じゃないか」

「ええ。なんでも噂で紅魔館の事や、お嬢様のことを聞いたそうで糸のお代はいらないから、お嬢様に会わせて欲しいと」

「それで、どうしたんだ？」

「紹介状を書いて渡しました」

「会ったのはいつごろ？」

「十分ほど前でしょうか？ 今からなら追いつけますよ？」

「成る程分かった。助かったよ」

御礼を言つて、私は浮かんだ。

足が地上から離れる様子を見て、メイドが不思議そうに首を傾げた。

「……？ あなたなら、走つても追いつくんじゃありません？」

「分かってないみたいだから教えておこう。彼の足は速い。もう紅魔館についているだろう」

迷っていたり、道草を食っていなければ、だが。

(どっちもありえそうだがな)

だからこそ空を飛ぶ。地上からでは、彼の姿を見つけることができなにかもしれないから。

私は一刻も早く会いたいのだ。あの人に。

「ああ、一体何百年ぶりでしょうね」

お久しぶりです。

元気でしたか。

「　　椿さん」

眩きと同時に、私は最大速度で飛翔した。

002 八雲藍と再会の兆し（後書き）

やっぱり最初は紅魔館！

……はい、聞き流してください。とりあえず2話です。

えー、普通なら、ここは椿視点で、紅魔館へ行こう、的な展開なんでしょうね。

すいません捻くれ者で。

あと、三人称から一人称が変わって、あれ？ と思っただ方もいると思います。

決してミスではありません。かといって無計画でもありません。これには理由があります。

個人的に、チートの一人称の話しつてつまらない気がするんですよ。いや周りの作家とか関係なくて、私が書いたとしたら。

だから、椿の視点で書くときには三人称。他の人の視点なら一人称、っていう具合に進めようと思っています。

私がやりたいのはあれなんですよ。ワトソン視点のシャーロックの話。凡人の視点で書かれた超人って、結構かつこよく映るんですよ。他人事だから、好きに超人超人言えますし。本人が言ったら寒い事でも、他人が言うならありですから。

私はそれがやりたかったんです。妖狐録の主人公はそういうタイプじゃないので、やれなかつたんですよ。あれは主人公が成長したりするパターンだから。

まあ、だからどうしたって言えば。

椿の一人称は、多分書かないってだけです。

あとがきが長くなってしまったので、この辺で。

……次回は誰の視点にしよう。

003 紅魔館の主(前書き)

この作品は東方の二次創作です。

原作ブレイク、キャラ崩壊、独自設定、オリキャラ幻想入り、駄文乱文、そもそもプロットが不完全、その他諸々が含まれております。それでも構わん！ という勇者以外は直ちに『戻る』ボタンを押して、他の小説を検索することをお勧めします。

あと最後に、『東方妖狐録』とはあまりリンクしてません。具体的にはあつちの主人公は出てきません。そちらも合わせてご承知ください。

それではどうぞ。

003 紅魔館の主

視点 『レミリア・スカーレット』

真夏の昼下がりに、奇妙な客人がやってきた。

「ふうん。吸血鬼らしい、真つ赤な屋敷だね」

そいつは女のような顔をしていて、けれど物腰は男。両性的な雰囲気ので、その性別は分からない。本人は男だと言っていた。だから私も、そいつは男だと思う事にした。中途半端は苛立っていない。

年は14ほどか。髪の毛から服まで、一切が白い。例外はその赤い瞳のみ。

「あら、真つ赤なのは嫌いかしら？ 血液みたいな瞳をしておいて」

「これはアルビノだよ。赤は、似合わなければ嫌いだね。けれどあなたにはお似合いだ、レミリアさん」

その言葉に、思わず眉を顰めた。

「……その呼び方こそ似合わない。私より長く生きてるでしょ、あなた」

「おや、分かるのかい？」

感心したように、椿と名乗った妖怪は笑う。

「分からないはずが、ないでしょ」

これほどの妖力、並みの妖怪のものではない。

こいつが吸血鬼でもない限り、この桁外れの妖力は、長寿の証としか思えない。

妖力というのは種族、年齢によって異なる。またその増え方も個人によってバラバラだ。

だが、こいつのそれは、個人差という領域ではない。

「私を、あまり甘く見ないで頂戴」

「これは失敬」

そいつは頭を下げた。詫びたようには、見えないが。

「ちよつとからかってみたつもりなんだがね。ほら、長生きしてる
と、人生つまんなくなるだろう?」

「だから暇つぶしに、と? からかわれたほうとしては、何とも言
えないわね」

気持ちは分かる。

これでも五百年を生きた吸血鬼、生きること飽きた事など、数
え切れないほどにある。

人間からすれば、阿呆な話だろう。

だが全ての妖怪にとって、つまらない、というのは死活問題なの
だ。

「けれど、今の私には無縁の話しね」

「ほう、それは興味深い事を言う。玩具でもできたのかい?」

「楽しい部下達が、友人がいるからね。彼らがいる限り、退屈はし
ないわ」

「それはよい事で」

くすくすと、口元を抑えてそいつは笑った。

「部下たちは、好きかい?」

「ええ」

「友人は、好きかい?」

「ええ」

「生きているのは、楽しいかい?」

「ええ」

「綺麗な髪だね。撫でていいかい?」

「ええ……え?」

……今なんか、凄く似合わない事を言っていたような。

薄く閉じ、思い出に浸っていた目を開ける。

白い妖怪は相変わらず、飄々とした笑みを浮かべていた。

何だ、気のせいかな。

「ん、それでは失礼」

「は、え、え？」

何がそれでは？ 何を失礼するつもり？

頭の中が『？』で埋め尽くされる。

だって、今まで人生とか退屈とか、そんな話をしてたはずでしょ？

髪の毛が綺麗とか、そんなワードはどこにも

「へえ。結構柔らかいね」

「は！？ いつの間に！」

気付いたら目の前の妖怪は消えていて、代わりに頭を撫でられていた。

「んー、手入れが行き届いてる。枝毛もないや」

「ちよ、こらやめなさい！」

気遣っているつもりなのか、髪の毛が乱れるような撫で方はしない。それは助かるのだが……

「いいじゃんいいじゃん気にしない」

「気にするわ！」

手足をばたつかせて抵抗する。だがすべてひよひよいと避けられた。

「減るもんじゃなし」

「減るわよ！ 私の自尊心とか自尊心とか自尊心とか！」

「吸血鬼は傲慢すぎるんだ。ちよっとくらい優しくなれよ」

「なりたかねえよ！」

叫んでも叫んでも、撫でる手は止まらない。

何故に、私はこんな子供のようない扱いを受けないといけないの？

「結構可愛いじゃないか。うんうん、君みたいな奴が羞恥に顔を染めると、やっぱいいねえ」

「このドSが！」

「サディストだなんて、そんな今更何を言うのさ」

そうか、こいつ蜘蛛だっけ。

最初るとき、自己紹介でそう言ってたな。蜘蛛の妖怪だと。

「クソ！ 何で私がこんな目に！ 私は吸血鬼だぞ！ 偉いんだぞ 強いんだぞ！」

「そう言った悪役は、すぐに死んでいくのさ。まあ 頭を撫でていた手が止まる。」

そいつはもう片方の手で私の片手を掴み、顔を寄せてきた。

「っ！」

耳に息がかかる。

一人に対応した事を後悔した。

こうなると分かっていたら、パチュリーを同行させたというのに。

「君には、悪役は似合いそうに無いが」

その声に籠められたのは、悲哀か歓喜か。

「この」

羞恥から叫びそうになる。

だが、声があがることはなかった。

ふと、そいつの気配が消えたのだ。

「……？」

疑問に思い、振り返ると。

我等がメイド長にナイフを押し当てられた、彼の姿があった。

「……………痛いな」

「……………」

「ナイフが少し刺さってるじゃないか」

「……………」

「それにしても驚きだ。まさか手品師だったとは」

「……………」

咲夜の沈黙をどう受け取ったのか、彼の声は相変わらず飄々としている。

首筋から流れ落ちる血も、特に気にしていない。

「……お嬢様に」

「ん？」

少しだけ、ナイフが押し出される。

流れる血液は増え、特徴的な白い服を染める。

「お嬢様に、何をなさっているのですか」

「いや、ただ可愛いねと」

「……あなたの手が、お嬢様の頭にあつたのは？」

「髪を撫でていた」

「一つ、覚えておきなさい」

咲夜の眼光が鋭くなる。

「そつだ咲夜言つてやれ。」

レミリア・スカーレットの尊厳は冒すべからずなのだ。

「お嬢様の髪を」

「……ん？」

今変なこと言わなかった？

ああそうか。私の髪の毛を汚すな、と言いたいんだな。

流石は完璧で瀟洒な我がメイド。私とは言う事が違うわね。

「お嬢様の」

「さあ言つてやれ。この無礼者に目にももの見せてやれ！」

「お嬢様の髪を触りたくば、まず私の許可を取りなさい！」

「そつだねえ。私の髪を洗つてくれるのはいつも咲夜だから、つて違つわ！」

椅子から思いつきり立ち上がり、背後の二人を見た。

座っていた椅子は派手な音をたてて倒れたが、気にしない。

「そもそも、何故あなたが許可しただけで触つていいのよ！ 私はどうした、この髪は私のものだぞ！」

「え？ いやですねお嬢様、撫でられて頭が混乱してます？」

「暗に私を馬鹿にするんじゃないわよあなたメイドでしょ！」

「さて、分かりましたか蜘蛛妖怪？」

「分かったよ、そうとは知らずすまなかった」

「私を無視するな！」

「分かればよろしいのです」

「うん。だから次からは椿と呼んでもらえるかな？」

「話を聞け！」

「脈絡がありませんけど……いいですよ」

「それは良かった」

こらメイド、私を無視して勝手に親密になってるな。椿、お前はフラグを建てるな。

「椿、椿ですか。首がコロソと落ちそうで、いい名前ですね」

「どこもよくねえよ！ むしろ不吉だよ！」

「失礼な。椿はね、一つの木にたくさん花をつけるんだよ」

「つまり沢山の首が落ちると！？ 更に不吉だよ！」

「不吉は紅魔館には似合いますね」

「赤いしね」

「似合わないわよ！ 変にこの屋敷を解釈するんじゃないわよ！」

「ふふふ」

「あはは」

誰か助けて。

003 紅魔館の主（後書き）

東方の二次、『忙しい人のための』シリーズの影響か、咲夜さんボケのレミアアツツコミが定着してる鈴ノ風です。

いや、このノリは多分たまにしかやらないと思いますが。

えー、レミア視点意外だった方は、おられるのでしょうか？
いそうな気がします。何せ私が意外に思ってますから。

最初はね、美鈴だったり大妖精だったりしたんですよ。でも気付いたら、レミアだったんです。

大ちゃんファンの方申し訳ありません。彼女の登場バツサリです。多分しばらく出てきません。

それではこの辺で。

早くフランでないかな。

004 交渉（前書き）

この作品は東方の二次創作です。

原作ブレイク、キャラ崩壊、独自設定、オリキャラ幻想入り、駄文乱文、そもそもプロットが不完全、その他諸々が含まれております。それでも構わん！ という勇者以外は直ちに『戻る』ボタンを押して、他の小説を検索することをお勧めします。

あと最後に、『東方妖狐録』とはあまりリンクしてません。具体的にはあつちの主人公は出てきません。そちらも合わせてご承知ください。

それではどうぞ。

視点 『レミリア・スカーレット』

あれからしばらくして、ようやく私は落ち着きを取り戻せた。

「取り戻せたんだから、いい加減手を離せ！」

いまだ私の頭を撫でる椿に、私は怒鳴り散らした。

てつきり、また冗談混じりに流すと思っただが。

「ん。いいよ」

そう言っつて、あっさりと手を離れた。

「……………」

「何かな？」

大人しく私と向かい合う彼に、私は疑惑の視線を送った。

「随分と、素直ね」

「いい加減、話が進まないからね」

「逸らせたのはあなたでしょう？」

「ちよつとしたジョークのつもりでね」

ジョークであんな事になってたまるか。

「それで？」

「何だいその反応は。君はジャパニーズジョークも理解できないのかい？」

「理解したわよ、嫌でもね。そういうことじゃなくて」

私は彼を指差した。

「あなたは話が進まない、と言っただわね」

そう、問題はそれだ。

こいつは、そんなことを意味もなく、言う奴か？

何となく、それは否だと思っつ。

こいつは嘘を吐くだろう。物事を誤魔化すだろう。

でもそれらは必要なときだけだ。必要な嘘しかこいつは吐かないし、必要なものしかこいつは誤魔化さない。

先ほど私をからかった時も、彼は嘘は言っていないなかった。そんな奴が、少しだけ真面目な顔で『話が進まない』と言ったのだ。

直感を信じるなら、それはつまり。

「あなた、私に用件があるのよね？」

それも、ちよつとした質問程度ではない、もっと複雑な用件が。

「……うん、当たり前だ」

面白い物を見たかのように、そいつは笑う。口ではなく、目で笑う。

「その通り。僕はね、君に対してお願いがあつてきたんだ」

「お願い？」

そうそう、と頷いて、椿は語りだした。

「僕はこの幻想郷には今日来たばかりだ。だからここにあるものは全て、見たことも聞いたこともない。これでも好奇心で生きてきた側面はあるからね、こういう所は、なんというか興奮するんだよ。好奇心と探究心を刺激されてね。そして、そういつた欲望には忠実に。それが僕の生き方だ。だから僕は、この幻想郷を隅から隅まで、己の目で見て周りたい。だが」

そこまで言つて、椿は咲夜が淹れた紅茶を口にする。これだけ一気に話すのは、流石に疲れたのか。興奮していたのか、凄い早口だったし。

「だが、残念な事に、歩いて周るための拠点がない。宿に泊まるには金欠だし」

「……つまり、あれ？ 宿には泊まれない、けど泊まる場所がほしい」

だから。

「紅魔館に泊めて欲しい、と？」

「そう」

「答えはもうできてるけど、その前に質問があるわ」

「質問？ ああ、僕の初恋なら数」

「あなたは」

たわ言は無視した。お前の惚気なんて聞きたくもない。

「あなたは私なんかよりずっと長い時間を生きてきた大妖怪だ。長生きすればそれだけ多くの知人ができる。なのに何故私のところへ来たの？」

拠点が欲しいのなら、知り合いに頼めばいい。

ここにはいない、などということは絶対はない。ここは幻想が住まう幻想郷。彼を知り、また今まで生きてきた幻想の存在が、ここにいないはずがない。

「……ああ、たくさんの知人はいるさ」

「なら」

「けど、連中にはちょっと会いにくくてね」

椿は肩を竦めた。

「冗談では、ないらしい。」

「知っている顔は何人かいる。八雲紫、伊吹萃香、八意永琳、風見幽香、洩矢諏訪子、神奈子、黒谷ヤマメ。他にも何人か。君の言う通り、僕は長生きだからね」

「随分な顔ぶれね。でも、彼らなら泊めてくれる気がするけれど？」
知り合いに宿を提供するくらいの優しさ、連中だって持ち合わせている。

「山の神社なんてどうかしら？ 神様なら、友の頼みを無碍にはしないでしょう？」

「あいつらは一番ダメだ。蜘蛛が神の社に泊まるだなんて、失礼すぎでお断りだね」

「……また、随分な嫌悪ね。神はお嫌い？」

「悪魔にそれを聞かれるとは。ご期待に答えられそうにないけど、神は嫌いじゃない。さっきも言っただろ？ 失礼だと。理由はそれだけさ」

知り合いといえる中なのに、失礼だから頼めない？

それって、なんて。

「身勝手な、考え」

「自覚はしてるさ」

彼は、自分に呆れたように、首を振る。

「ま、そんな感じでね。諏訪子たちもそうだけど、泊めてと頼めない理由は、あいつらにあるんじゃない」

「ふうん。で、神社は分かったけど、他は？」

神社の理由は分かった。随分と自分勝手な理由だが、理解はできた。

なら、他は？

他の者たちには、そんな理由は無さそうだが。

「あつたよ。沢山ね。特に八意と諏訪子と……ああ、紫は酷かったな。何度か殺しあつた」

「……………相当ね」

少し呆れた。

永い長い人生。こいつはもしかして友人より、敵を作ってきたんじゃないか？

「八意と諏訪子と紫、あと萃香は昔色々あつたから泊めてとは頼みにくい。幽香は、同じ屋根の下にいたら、暴力的に襲われる」

「あなた、そこそこな実力持ってそうだしね」

若干戦闘狂の気がある風見幽香なら、寝込みくらいは襲いそうだな。「ヤマメは……いやそもそも、通行の便が悪い地底を拠点にはしたくない」

成る程その通りだ。地底なんて、先の亡霊騒ぎでもない限り、地上の連中は誰も行きたがらない。

地底の連中もそう。彼らは地上には居れない、居たくないから地底に去つたもの達だ。そんな彼らが、地上に来るはずもない。

誰も向かわず、誰も来ない。必然的に地底と地上の通路は、殆どなくなつた。

幻想郷の中でも地底は、あの世の次に行き来が難しいところだろう。元地獄なだけに。

「成る程、ね。理由は分かったわ」

「うんうん。それじゃあ」

「ただし」

何か期待するような目に、人差し指を差す。

「条件があるわ」

「条件？」

指を指された事は気にせず、椿は問うてきた。

「そう、条件よ。私もね、今日初めて会ったような奴に宿を貸すほど、親切じゃないのよ」

「あー、うん、それもそうか」

顔には落胆の色がある。無償でも期待していたのだろうか？ だとしたら馬鹿としか言いようがない。

「それで？ その条件とは？」

「あなたに、妹の遊び相手をして欲しいのよ」

004 交渉（後書き）

そろそろタイトルが出てこなくなりました。鈴ノ風です。

何か、捻っても何もでないんですよ。今回のだって安直過ぎるし。

ずっと前から気付いてはいたんですが、あれですね。私にタイトルのセンスはないようですね。

それはそうと、ようやくフラン登場フラグが立ちました。

待っていてくれフランドール。登場まであともうちよいだ。

そして、椿の能力も後少しで明かされる。

……はい嘘ですごめんなさい石投げないでください。あいつの能力はしばらく経たないと出てきませんから許して下さい。

さて。

今回は、これにて。

（そろそろ一日一話が辛くなってきた）

005 条件（前書き）

この作品は東方の二次創作です。

原作ブレイク、キャラ崩壊、独自設定、オリキャラ幻想入り、駄文乱文、そもそもプロットが不完全、その他諸々が含まれております。それでも構わん！ という勇者以外は直ちに『戻る』ボタンを押して、他の小説を検索することをお勧めします。

あと最後に、『東方妖狐録』とはあまりリンクしてません。具体的にはあつちの主人公は出てきません。そちらも合わせてご承知ください。

それではどうぞ。

視点 『レミリア・スカーレット』

「妹さんの、遊び相手かい？」

「そう。名前をフランドール・スカーレットというのだけど知っているかしら？」

「ああ、そう言えば白黒の魔女が言っていたな。紅魔の地下に狂気の妹あり、と」

白黒……………霧雨魔理沙の事か。

あのお調子者の人間は、一体何をやっているんだ。

「その認識は間違いではないわね。ええ、一切間違っていない。確かにフランは地下に閉じ込めていたし、彼女は狂っている」

「それは良かった。何せ情報源が胡散臭くてね」

魔理沙あなたは何をした。どうしたらここまで疑われる。

「いやなに、大切な刀を盗まれそうになってね。『死ぬまで借りただけだ』とか何とか言ってる」

「……………馬鹿なのかしら、あいつは」

『胡散臭い』など、彼女らしくない評価だと思ったが、成る程。

いきなり物を盗まれそうになれば、過敏に警戒しても仕方がない。彼女は蒐集癖があるらしくてね。そうやって、珍しい物を見つけては欲しがるのよ」

「しかし盗みはいけないね」

「ええ。私の友人も、常々悩まされているし、そろそろお灸を据えたいのよ」

「それならば安心したまえ。僕が、取り返す際に泣くほど反省させておいた」

「……………心の中で、魔理沙にした質問をあなたにするわ。あなたは何

をした？」

「聞きたい？」

ニツコリ笑いながら首を傾げる椿。目が凄く怖い事になっていた。

「……………遠慮しておくわ」

「そうかい。そうだね、話もずれてしまったし」

「さて、妹のところまで話したかしら？」

「うん。地下に幽閉されていた狂気の妹さん。彼女の遊び相手になつて欲しいんだっけ？」

「ええ」

フランは優しく言えば情緒不安定、厳しく言えば気が触れている。原因はおそらく能力だろう。

彼女の能力、『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』は強力だ。姉である私ですら、彼女の前では片膝をつくほどに。

「フランに限らず、吸血鬼には戦闘狂の気があるわ」

「それは知ってるよ。何せ元々が血を求める生ける屍だ。血が戦闘リレンゲデッドに変化するの^レは当然の流れ。そうマイナーな話ではなかったと思っけど？」

「その通りよ。吸血鬼は血を、戦いを求める」

私も、そんな一面は確かにある。

「だけど、フランのあれはそんなレベルじゃないのよ」

吸血鬼には戦闘狂の気がある。

だが、フランは違う。彼女は戦闘狂そのものだ。

「戦いを望み、血を望み、死を望み、悲鳴を望み、苦痛を望み、絶望を望む。目に映るのならば石も人も関係なく壊す。それは吸血鬼としても異端よ。鬼と評される私たちもね、流石に狂人ではないし、流石に殺人鬼ではない。私の知る限りね、吸血鬼は人間をグチャグチャの肉塊に、それこそ見るも無残なものに変えて、快楽を得るよ
うないかれた精神構造はしてないわ」

脳裏には、数百年も昔の思い出がある。

私が見た、初めてのフランの殺人。

今まで、両親が人を殺す姿は何度も見た。私だって、人くらい何人も殺している。人の血を吸って生きていく以上、殺人くらい慣れないといけないから。

それに、人を殺すという行為そのものが、妖怪として当然の事だったから。

だけど、フランのあれは違う。

私たちの殺人は手段だ。人を殺す事で血を、存在を得るための手段。だから誰も、不要な殺人などしない。

勉強を思い浮かべれば言い。将来の為、受験の為、就職の為に必要だから人は勉強をする。けれど、それは必要な分だけだ。勉強が好きな人間でもない限り、最低限の事しかない。

だってそれほど好きじゃないから。別段したいとも思わない物を、何故無駄にしなければならぬんだ？

私たちは、そういう風に殺人を捉えていた。必要だからやる、ただそれだけ。

だからこそ、最初にフランが人を殺したとき、いや壊したとき、私は心底から恐怖した。

あんな風に。

返り血を浴びながら悦楽する吸血鬼など、一度も見た事がなくて。

「へえ。そいつはまた、存分に狂ってるね」

「よくある破壊衝動よ。物を壊すということに、彼女は心地よさを覚えてしまった」

壊して壊していくうちに、彼女にとってそれが大切な事になってしまった。

しかも、彼女はこの紅魔館の中で敵なしの強さを誇っている。止めようにも、誰にもフランを止められない。無理をすれば誰かが死ぬ。

抑制するものが居ない狂気など、すぐに溢れてしまう。溢れた先

がどんなものかは、誰にだって想像できるだろう。

待っているのは死。フランは自信が死ぬその時まで、周囲にいる全てを壊し続ける。

「だからこそ、彼女の遊び相手が欲しいのよ」

魔理沙では足りなかった。所詮人間の域を出ない彼女では、フランの遊び相手は務まらない。あの時のフランは、実力を出し切ったりはしなかった。

「……話しを聞く限り、それは遊び相手というより、殺し相手な気がするね」

「あら、解釈は自由よ？」

どちらにしろ、私からの質問は変わらない。

「それで？ あなたはこの屋敷に泊まりたいの？」

もし泊まりたいなら、こちらの望みをかなえてもらおう。

即ち、フランへの抑制。

完全など望まない。欲しいのは、彼女の蓄積した破壊衝動を減らす事。

やがてフランが衝動に耐え切れず、全てを壊そうとする日がくるだろう。

それは、皮肉のように、神々の黄昏に似ている。

彼女はきつと、スルトが世界樹を焼き払うように、全てを破壊するのだろう。

奇しくも、互いに握りしは『レーヴァテイン』なのだから。

「……成る程、ね。狂気が」

一体何が楽しいのだろう。

椿は子供のように無邪気な笑みを、浮かべていた。

「それは最高だ。この条件、飲ませてもらおう」

005 条件（後書き）

まず最初に、二日も空けてすいませんでした。

待ってねえよ、という方は、心の中だけで罵ってください。口に出されると凹みます。

連載が止まった理由は、まあいろいろです。ゲームとか本とか宿題とか。

本当は、昨日は載せるつもりだったんですが……

次回から、やっとフランが出てきます。

彼女に関しては、行くところまで行かせました。だから、人によっては嫌悪感を覚えるかもしれませぬ。ご了承ください。

今回はこの辺で。

それでは。

006 狂気(前書き)

この作品は東方の二次創作です。

原作ブレイク、キャラ崩壊、独自設定、オリキャラ幻想入り、駄文乱文、そもそもプロットが不完全、その他諸々が含まれております。それでも構わん！ という勇者以外は直ちに『戻る』ボタンを押して、他の小説を検索することをお勧めします。

あと最後に、『東方妖狐録』とはあまりリンクしてません。具体的にはあつちの主人公は出てきません。そちらも合わせてご承知ください。

それではどうぞ。

視点 『十六夜咲夜』

物事とはよく分からないものだ。

人里で偶然であった知りもしない妖怪が、今は私の後ろを歩いている。

「……本当に」

分からないものだ。

最初に出会ったときは、こんな事になるとは思っていなかった。てつきりお嬢様とお話しして、そのまま帰るのとばかり。

まさか、止めてくれと言うとは。

(私も、考えが甘い)

たまに天然と言われる私だが、これははたして天然に入るのかどうか。

それにしても。

「……随分と」

「何かな？」

聞こえないと思って出した独り言に、間髪置かず返事があった。

ここが地下に通じる階段だったからだろう。石でできた壁が、音を反響させ、つぶや木を彼の耳に届けた。

「いえ。随分と余裕だな、と」

先ほどから、彼は興味深そうに当たりを見回している。それは警戒ではなく好奇心。少なくとも、これから死地に向かうものの反応ではない。

「大げさな事を言うね。僕は遊び相手をするだけ。死んでやる義理も道理もない」

「それが余裕だといっているんです」

いや、慢心と呼ぶべきか。

「妹様は強い。彼女の『ありとあらゆるものを破壊する程度の能力』は強い。あんなモノ、本来吸血鬼には備わってはいけない代物なんですよ」

ただでさえ基本スペックが妖怪一な吸血鬼が、更に最強の破壊力を得る。これ以上の不公平が、一体どこにあるのだろうか？

「あなたは長生きだ。強力な大妖怪だ。ですが」

私は歩む足を止め、愚か者に振り返る。

彼は、笑ったままだった。

「覚えておきなさい。あなたの力など、妹様の足元に過ぎない」

彼は笑ったままだ。

「どんな小細工も、彼女には通じない」

目を細めて睨む。

彼は笑ったままだ。

「いまだ分かっていないんですか？ なら教えて差し上げましょう。蜘蛛の糸など無力だ。いくら糸を張り巡らせようと、彼女はその事如くを引きちぎるでしょう」

それは事実。

吸血鬼のパワーと能力、その二つの前に敵など居ない。

だと言うのに。

それが理解できたはずなのに、彼は笑ったままだ。

「……っ！ いい加減にしてください！」

思わず声を荒げた。

何故、今日であつたばかりの妖怪にここまでするのか、私にも分からない。

分からないまま、口が動く。

「あなたは妹様に敗北する！ これはもう決まってる事なんですよ！ 水が上から下に落ちるように、地球が回るように、光速で動けば時が止まるように当たり前なんです！ 何故いまだ理解できないんですか！」

「……無論、分かっているさ」

「分かっているい！」

「それは君のほうだろうか？」

なぜだろうか？

いまだ余裕を失わぬ瞳に、私は気圧されていた。

「僕がフランドールより弱い？ 言っておくよ、僕はそんな事は分かっている。全て分かった上で笑っているんだ」

嘘だ、と心は叫んだ。

分かっているならなぜ、笑えるのか。

「分かっている。分かっているから、もうそんな当たり前の事で騒がないで欲しい。無駄に時間を食うだろうが」

さっさと進んで、という暢気な声で、ようやく私は、自身が停止していた事を知った。

足も、手も、口も、呼吸さえも止まっていた。

原因は明らか。

全てを分かったと言いながら、いまだ楽しそうにしている目の前の妖怪。その非常識的な態度に、私の脳みそが追いつけていないのだ。

「……失礼、しました」

私は頭を下げて、再び目的地を見る。

たった十歩先にある、木の扉。

「はあ」

ため息が零れる。

結局、私は彼を止める事ができなかった。

なぜ止めなかったのかも、分からないまま。

つい先ほど、姉から連絡があった。

曰く、遊び相手が来るらしい。

「ふんふんふーん」

それを聞いたとき、私は舞い踊った。今も踊っている。

遊び相手。

それは言葉どおりの意味ではない。その真意は私に壊されるために用意された、生贄だ。

可哀想、と思つた事はある。

そいつが持つていたであろう未来、その全てが台無しになつただ。

同情した事は、何度かあつた。

でも、それでもそれだけだ。

同情する事はあつても、心を改めるつもりはない。

だつて。

「だつて、楽しいんだもん」

何かを壊すときも、今も。

よく知らないダンスを踊るほど、楽しい。

「ふふつふーん」

私は今、部屋を飾り付けている。勿論、ハツ雲椿と言うよう界を歓迎する為だ。

彼は今すぐ向かってくるそうだから、あまり時間がない。それが一番惜しい。

こんな短期間では、ちょっとしたイメチェンしかできないではないか。

「ふんふつふーん」

だが、それでもないよりはマシ。

私はうる覚えの歌を歌いながら、最後の飾り付けを終えた。

「えっと」

用意した物を確認する。

机と二人分の椅子、紅茶とティーポット、美味しいお菓子と大好きなぬいぐるみ。

うん。全てそろっている。

「早く来ないかなー」

準備が終わって暇になったから、呟いた。

来たら、一体どうしよう？

「まずは、精一杯おもてなしをしよう」

接客はうる覚えだけど、それでもできうる限り。

そしてお茶を飲みながら、色々な事を聞いてみよう。

大丈夫。相手は私より年上だそうだから、話題には困らない。

楽しく、たくさん、お話をしよう。

話して、話して。

私の中で、彼が大切な人になるくらいに話し合っ

そして、完膚なきまでに破壊しよう。

親密になる為に尽くした数十分を、生まれたばかりの友情を、たった一瞬で台無しにする。

無残にも飛び散る肉と血液。

きつと呆けてしまうほどあつという間の出来事だろう。一体今までの時間はなんだったんだと思うほどに、すぐ彼は壊れるだろう。

それでいい。

あつけなく、無価値に散るほど、私にとっては心地良い。

築き上げたものを冒瀆する行為が破壊なのだ。

何かを壊せば、その過程が無価値になるのは当然。

「あはっ」

そんな、全てが台無しになる瞬間を思い浮かべていたら、私の口からよだれが零れそうになった。

慌ててハンカチで拭き取る。危ない危ない。せつかく用意した一

張羅が汚れてしまうところだった。

まだ事は始まってすら居ない。

始まる前から終わっては、つまらないではすまない。

「ああ。でも」

楽しみだ。

早く着て、と急かしてしまう。

早く、早く。

ここに来て、そして私と話しましょう。

いっぱい話して、私と仲良くなりましょう。

「さあ」

無残な死体となる為に、私と仲良くなりましょう。

006 狂気（後書き）

個人的に、フランは狂気に蝕まれたヒロイン、が似合いそう。でも今回みたいな、純粋な狂人も似合いそう。

皆さんはどちらが良いですか？

私はうーうー唸るレミリアが（関係ない）

なんか、他の二次のフランちゃんが可愛かったので、今回は捻くれて狂気一辺倒にしてみました。

狂気は、こんな感じでいいでしょうか？

自分としては、やれる限りやったつもりなんです。

次回からは、遂に椿とフランのバトルが始まる、気がしないな。きつとあと一話にかかる。

まあでも、バトルシーンは気合を今以上に入れて取り組むつもりです。手に汗握ってもらえるかは、保証できませんが。

では、また次回。

007 吸血鬼と蜘蛛の対峙（前書き）

この作品は東方の二次創作です。

原作ブレイク、キャラ崩壊、独自設定、オリキャラ幻想入り、駄文乱文、そもそもプロットが不完全、その他諸々が含まれております。それでも構わん！ という勇者以外は直ちに『戻る』ボタンを押して、他の小説を検索することをお勧めします。

あと最後に、『東方妖狐録』とはあまりリンクしてません。具体的にはあつちの主人公は出てきません。そちらも合わせてご承知ください。

それではどうぞ。

007 吸血鬼と蜘蛛の対峙

視点 『フランドール・スカーレット』

私の目の前には、真っ白な妖怪がいる。

ハツ雲椿。私が待ち望んだ客人だ。

彼が来て五分ほど。その間私たちは、ただ会話していた。

咲夜は彼を案内したあと、部屋の隅で待機している。実にメイドらしい態度だと思う。メイドの態度とかよく分からないけど、そう思う。

「ねえねえ、この熊さん可愛い？」

「可愛いね。アクセサリーが虹色で、君とおそろいだ」

お気に入りのテイベアを掲げ、問い掛けると即答した。誉められて悪い気はしなかった。少し顔が熱くなる。

彼は優しい人だ。

全面的に自分勝手だけど、どこかで必ず相手を気遣う。そういう意味で、優しい。

「じゃあ、この羽はどう？」

私の異形の羽。彼は一体どう思っているのだろうか？

「うん？ 変わった羽だね。宝石みたいで綺麗だ。一体いくらでもらえるかな？」

変わっているのか綺麗なのか、ハッキリして欲しい。誉められたのは嬉しいけど。

「一兆円」

「僕の血でどうだい？」

いくら、と聞かれたので適当に答えたら、またすぐに返事がきた。成る程、一兆円なんて払えないから、代わりに血を上げようと。

吸血鬼が相手なら、血液もそれなりの価値を持つだろうと思ったの

か。

「白い血なんて要らないよ」

確かどっかの蜘蛛妖怪は、血液が白色だったらしい。彼の事ではないだろうが、彼も蜘蛛だし。

「結構博識だね」

言いたいことは通じたのだろう。彼は笑った。

つられて、私も笑った。

「お菓子は美味しい？ ちょっと前にお姉さまが巫女から貰ってきたものなだけだ」

「美味しいよ。紅茶に羊羹は不釣合いな気がするけど……」

そこは私も思っていた。

でもしかたがないじゃないか。お菓子はそれしかなかったんだから。

「ま、いいけどね。羊羹好きだし」

なら文句言うなよ。

そう心の中で思いながら、一言呟いた。

楽しい。

彼との会話は、楽しい。

彼は優しく、面白くて、話しているとどんどん、好感度が上がっていく。

一時間はかかると思った。彼が私の中での大切になるのは、そのくらい時間がかかると思っていた。だけど結果はその12分の1。

いいことだとは思うけど、ちょっと物足りなさも感じている。もうちょっと、お話ししてもいいと思う。

「……でもうん、これ以上話して、情が移ったら大変だ」

そのほうが壊した時の喜びも増すだろう。だけど、壊したあとに私が泣いてしまう。

仲良くなりすぎてはいけない。

情が移ったが最後、私は彼を壊せなくなる。

現に、私は紅魔館の住人達を、破壊する事ができない。

殺そうとすると躊躇してしまふ。だって、悲しいのは嫌だから。

「じゃあ、そろそろ潮時かな？」

「うん？」

何も知らない妖怪が、笑顔で首を傾げた。

「何が、潮時なのかな？」

「どうしよう？」

当初の予定では、彼に何も知らせず、すぐ壊すつもりだった。だけれど、今になって躊躇する。

こんなにも楽しいのに、そんな簡単に終わらせてよいものか、と

このまま、笑顔で私の目的を告げて、呆然としているところを壊そうか？

(……面白そう)

そしたら、顔だけ残しておこう。

その呆然とした表情だけを、この世に残しておくんだ。

きっと楽しいだろう。

それを見るたびに、私は腹を抱えて笑うのだろう。

腐ったらまずいから、防腐剤でもかけようか？

飽きたら飽きたでいい。そしたら捨てるだけだから。

「実はね」

いいながら、机の影で杖を構える。

私の羽と同じく、異形の杖。

彼の問いに答えた瞬間、この杖を思いつきり横に振るう。

彼は杖に気付くことなく、机ごと胴体を粉碎される。

その一連の動作をシュミレートしただけで、心臓が高鳴った。

「実は、何だい？」

ああ、全くなんだそれは。

そんな無邪気に、疑うなんて知らないって風に首を傾げるなよ。

誘ってるのか？ 問いに答える前に壊しちゃっぞ。

……っと、いけない。

何も知らないような無邪気さを見ると、どうしても現実を突き

つけたくなってしまう。これもある種の破壊衝動だろうか？

まあきつと、私は子供だから、同じ子供の無邪気さが許せないとか、真相はそんな感じだろう。それはそれでいいけど。

「私ね、あなたを壊す事にしたんだ」

その言葉の直後、私の腕が跳ねる。

机の影から、横一文字に杖を薙ぐ。

彼に口を開く暇なんて与えない。遺言すら残させない。残していいのは、みつともない最後だけ。

さあ。

「死んじゃえ！」

全てを、終わらせよう。

「！」
その胴体に杖が触れる直前、ようやく何かを察知した椿が、表情を変える。

楽しそうな笑みから、少し、ほんの少しだけ真剣身を加えた、そんな顔に。

（遅いなー）

対応が遅すぎる。気付かないように殺気も隠し武器も隠していたんだから、手遅れになってしまうのは仕方がない。けれど、彼は私たちとは比べ物にならないほどの年月を過ごした大妖怪なのだ。もう一瞬早く対応したって、不思議はないじゃないか。

（どっちにしる間に合わないけど、ね）

結局、杖は机を粉碎し、水っぱい音を立てて椿を吹き飛ばした。

彼の体は横にくの字に曲がり、私から見て前方へ銃弾みたいな速度で飛んでゆく。そして壁にはぶつからず、壁を埋め尽くすように置かれた私のお気に入りのぬいぐるみたちに衝突した。

「あー、あーあ。その子達、結構長持ちしてたんだけどなー」

彼らはお姉さまから貰った物。十年程前になるだろうか？物といたら真つ先に壊す私にとって、十年も持った彼らはお宝だったりする。

たった今、綿を撒き散らしているが。

「さーてと。椿、生きてたりする？」

吸血鬼は五感も優れている。耳を澄ますことなく、十メートル先の相手の呼吸を聞き取るくらい、簡単だ。

その上で今回は目を閉じ耳に全ての神経を集中させている。これなら心臓の鼓動だって聞き取れるだろう。

なのに、無音。

あるとすれば、部屋の隅っこで影薄く突っ立っている咲夜の呼吸音が、ぬいぐるみから撒き散らされ床に落ちていく綿の音くらい。

うん。死んでる死んでる。

「それじゃ、うん」

死体の解体でもしようかな。

「こっとう時って、どんなこと言えばいいの？ 『殺して解して並べて揃えて晒してやんよ』かな？」

わざとらしい明るい声を出して、椿の死体へ歩み寄っていく。でもな。殺すも何も、もう死んじゃってるし。私零崎人識じゃないし。殺人鬼じゃなくて吸血鬼だし。

「ねーねー。どうすればいいのー？ 教えてよ椿」

うわ、ぬいぐるみに見事に埋まってるな。綿を紅く染めて、これが綿じゃなくて雪なら、絵になるくらい綺麗だな。

「うん？ その場合、私は雪を用意するべきだったのかな？」

しかしこれはこれでよかったですから複雑だ。

「その辺もどう思う？」

椿の頭を発掘し、それを持ち上げながら聞いてみた。

答えは勿論

「知らないね。勝手に決めてる」

返ってきた。

007 吸血鬼と蜘蛛の対峙（後書き）

最初に、申し訳ありませんでした。

月単位で間を空けてしまいました。

いや、サボってたわけじゃありませんよ？ ただ一種のスランプに

陥ってただけでってぎゃあー！ 石はやめて石だけは！

次からは、ここまで開くことはないと思います。就職試験が（合否はともかく）終了したので、こちらに割く時間が出来ましたので。

次回から戦闘入ります。そして椿の能力が明かされ……るのかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5611u/>

白い蜘蛛と幻想郷

2011年9月21日03時27分発行